

一天使がいる風景一

歩道の真ん中に天使を見つけた。偶然のことだった。意図したことじゃない。若い俳優が、存在しないものを探すことほど無意味なことはない、と当たり前のことをさも格好良く言っていた。だからこれは偶然だった。無意味なことはしない主義だ。

国道を四車線挟んだ向かいの街路に僕はいる。真つ昼間の太陽は財布をジーンズにねじ込んだだけの軽装に重みを与えていた。部屋に籠もりがちの僕は人並み以上に熱に弱い。一日の中で一番活動的な昼間の太陽は、だから僕にとつて天敵だった。

汗ばむ額を拭い一つも天使を観察することは忘れていない。なぜ天使なのか、そう呼称する決め手となったのが、風になびく金髪の輝きよりも一層光り自己主張する金の輪っかを見てのことだった。天使の登場する童話の絵本で、たびたび頭上に描かれる金の輪っかは、天使に対する一種の象徴となっている。だから、宙に浮くその輪っかを見た時、単に容姿が綺麗な外国人女性と片付けるのではなく、幼い頃から絵本で触れてきた天使と判断したのだ。

ゲームのやり過ぎなのかもしれない。うだるような夏のせいかもしれない。馬鹿馬鹿しいのは分かっていた。だけど、もしかしたらの興奮を止めるのは僕にはできなかった。

天使と見なすだけの理由は多々あった。たとえば到底衣服とは呼べない、ただ体にまとっているだけの白い布。現代においてそんな衣類はファッションショーでしか活躍できない。機能性を排した装飾重視の代物は時代錯誤に他ならない。ここは神話の世界じゃないからだ。

たとえば、上半身の大そうな服飾に対して、一切着飾らない素のままの足元。地面に対して開けっぴろげな素足は、外見の涼しさだけはサンダルもかくやだが、熱せられたアスファルトの影響をもろに受けている。真つ向から夏に勝負を挑むそのスタンスは、現代に生きている人間の適切な振る舞いではない。人外の何かと決めつけたのは妥当だ。そしてたぶんそれは当たっているだろう。

ここはオフィス街の近い人通りの多い道だ。あれだけ派手で奇抜な格好をしていれば当然人の目を引く。なのに通行人は誰一人として天使の姿を気に留めていない。つまり誰も天使の存在を認識していないのである。唯一僕一人を除いて。

物思いにふけり路面にやっていた視線を再び天使の方に向けると、こちらを見ていたのか、天使と視線がかみ合ってしまった。迂闊だった。天使はともかく、これだけ人の流れが激しい中で立ち止まっていると、周囲から浮いて見えるのは無理もない。考える暇がなかったにせよ、不審人物から距離をとるのは社会常識。もつと慎重になってもよかった。夏休み前に先生から嫌というほど聞かされた教訓が全く生かされてなかった。

天使の青い目はおおよそ人の温かみというのが籠もっていなかった。まばたきのない直視

は、動揺に追い打ちをかけて精神を揺さぶってくる。あまりの薄気味悪さにその場にうずくまってしまった。アスファルトの熱が肌に伝わってくる。気持ち悪さに体を縮ませて對抗する。天使を視界から外してしまったのは失敗だった。そのせいで天使の次の行動を予測できなかった。

ようやく気分が落ち着いていた。だが安心したのもつかの間だった。路面にやっていた僕の目が異常なほど真っ白な素足を捉える。勢いよく頭を上げると、すぐ近くに無表情な天使の相貌があった。威圧感と恐怖感に僕の体はすぐみ上がった。意思に反して動くことがままならず、吹かれる風の勢いに乗って後ろに倒れ込んでしまう。情けなかった。声を出すことさえ許されないその場の雰囲気はより惨めさを植え付けた。

「貴方には、私が見えている」

驚いた。あの不穏なおもむきから出てきたものとは思えなかったのだ。鈴を転がすような澄んだ声は、体に溜まっていた緊張感を解き、なぜか気持ちをリラクセスさせる。さっきまで怯えていた相手なのに。

視界から、忙しげに小走りしていた人々の雑踏が消え去った。せわしなく電話に応じるサラリーマンやおしゃべりに興じる高校生の雑音も呼応するようになっていた。狐につままれた気分で天使を見上げる。もうこの場には天使と僕の二人しかない。他は何も見えなかった。

天使の断定するような問いに答える。ものが詰まったように喉からは声が出ないので、頷くことでその代わりとした。

「そう。ということは私は貴方の願いを叶えてあげないといけない」

元々混乱していた脳は急な展開にさらについて行けなくなった。願いを叶える？ なんのゲームの話だ。

「私が見えるということ、貴方の願いは分かっている。与えてやろう」

強引に進められた一方的な短いやりとりを終えると、天使はゆっくりと両の瞼を閉じ、一拍の間を開けて素早く開いた。その動作は端からすれば、気合を入れるための準備運動にも見え、単に目の乾燥を防ぐための反射運動にも見えたが、その行為には意味があったらしいことを僕の精神は機敏に捉えた。簡単に言えば力が湧いてくる。勇気かやる気のどちらかが天使の特殊な力により与えられ、気力がどこからともなく溢れてきた。ゲームのような展開だ。

元々僕は行動力のある方ではなかった。悩んだ末に沈黙を選択する気質の持ち主で、そのことで苦しめられることが多く、言い分をはっきり言葉にできないせいで友人関係に破綻をきたしたこともままあった。そのことを苦痛に思い、また変えることができたらと精神の支えにもしていたのだが、消極的な性格が何かしらの行動にでることを拒み負のスパイラルに陥っていた。

しかし、その葛藤はすでに解消された。予期せぬ天使との遭遇により、意思とは関係なく強制的に、不安の要素は取り除かれた。前の自分を思い出せない、想像することさえでき

なかった。これが僕なのだとして自然に受け入れられた。

強烈な昂揚の波に晒されて自分のごときか頭が回らなかったが、落ち着きを取り戻してみれば周囲の雑踏が天使と会う前に戻っていた。感謝を告げようと天使の姿を探すが、もうこの場から消えているようだった。その代わり僕の目は髪を派手に染めた若者に絡まれる女の子をあざとく見つけた。返しきれない恩は少しでも返しておかないといけない。世の中のために。きつと天使もそう願っている。

「あなた、そこでなにやってるんですか」

おのずと足はその若者へと向かっていた。女々しく伸ばした長髪はくすんだアッシュに染められており軟派な性根が窺えた。気持ち悪い。僕は対峙した緊張感より、これまで自分が出したことがない強気な声のことに意識がいつていた。しつこくナンパをしていた長髪の若者は露骨に眉をゆがめ、突然の来訪者たる僕に嫌悪感を隠そうとしない。

「あああ？ おめえになんか関係あるのか？ 勝手に人の事情に立ち入ってくんないよ！」

いやらしげに尖らせる口に伸びた髪の毛出入りしている。彼の態度は好戦的意思が全開で、感情の帆船は不快感と敵対感の強風に煽られた。こういう輩が世の中にはびこっているのが僕は許せない。

相手がぐちぐちと嫌みったらしい悪態を上から目線で垂れてくる。

「女の子は嫌がってるじゃないですか。自分の行為を恥ずかしいと思ったのなら、今すぐ謝りなさい。それでもあなたが間違っていないというなら、僕にも考えがあります」

「うるさいなあ。オマエ嫌われてるだろ。年上に対してそんな態度とるなんて、社会のルールを分かってないぞ、こら」

ちらりと長髪の若者の隣に所在なさげに佇む怯えた顔の女の子を確認する。実力行使をいとわなくてもいいだろう。もう若者の言葉は耳に入らない。固く握った拳を右側の背を反らせる形で後ろに引き、対峙する間合いを縮めるがごとく構えた拳と反対の足を一歩前に進める。我は正義なりと、意思を込めた瞳で睨みつけ、悪者面の若者の顔に拳を放った。

肉が肉を打つ反動の音に女の子はビクツと小さい体をさらに縮めたが、どうやら状況が飲み込めたらしく、ホツとした安堵の表情を見せる。逃げてくださいと、声をかけると手提げ鞆を大事そうに揺らしながら女の子は足早に去って行った。ありがとう、と遠くから聞こえた気がする。

降参という合図のタップを受け取って僕は若者を殴っていた手を止めた。僕らの様子を眺めていた道行くギャラリ―たちは感心したように驚嘆の声を上げ、両手を打って拍手を贈られた。そのことをしつかり知覚すると急に気恥ずかしさが立ち、悪漢を倒した小さな満足感は霞みと消えた。いいことをするとこんないい気分になるのか。知らなかった。

正義感はあるなそれなりに持っているものだが、僕は昔から周囲に気を配っていたせいで、ひとときそれは強かった。不良に絡まれてる学生を見て助けたいと思ったことはよくあった。けれど実行に移すことはできなかった。そのことに対して自分自身にひどく憤ることもあった。それはもう過去のことだ。この自分は違う。見過ごしてきたことに意見できる

ほどの勇気を手に入れた。知らずうちに笑みが溢れ、漏れそうになる笑い声を嘯みしめた。ゲーム屋に寄るつもりだった今日の予定を返上して、警官みたく見回りをすることにした。一人自警団のようなものかもしれない。

顔を上げるとに、髪を赤く染め上げた不良が目に入る。次の行動が決まる。

次々と悪漢を倒すヒーローに憧れて、幼い僕は将来の夢と題した作文に正義の味方になりたいと書いたことがあった。ヒーローという響きはくすぐったいが、今の僕はそれっぽい者になっていないのだろうか。

夢見た自分に変えてくれた天使に感謝する。まだまだヒーローにはいたらない僕ではあるが、みんなを守ろう。そんな決意が胸にはあった。

一 悪魔がいる風景一

歩道の真ん中に天使を見つけた。その言葉が道端でうずくまる少年の口から発せられたのを感じのアンテナは敏感に捉えた。日頃から事件を望む人でなしの耳は、どんなに小さな声でも、それが平凡では飽き足らない野次馬魂を刺激するのならば聞き逃しはしない。性格が悪いと友達からもよく言われる。分かっているが、まあ、誰にでもどっかに欠陥はあるものだ。

少年は目立っていた。突然立ち止まったと思ったら、妙な奇声を発ししやがみ込むし、夏の日差しだけでは説明できない大量の汗を流していたからだ。持病の発作にでも見舞われたのか、と最初こそは心配したものの、様子を見守るに連れ、これはおかしいなと疑問を抱かざるえなかった。通りすがる人も同じだったようで、親身になって駆け寄ろうとしていた善人も彼のおかしな言動に自然と眉を潜めると、怪訝な顔色をして離れていった。そのため、この道は立地上いつも混雑しているのだが、彼の周りだけバレバレの落とし穴があるかのように避けて通られ、アスファルトの路上にポツカリとした空間が空いていた。

彼の筋向かいにある雑貨屋の壁に背を預けしばらく彼の動向に目を向けることにした。容赦ない日照りから体を守るように片手を頭上に掲げ、もう片方で肩から提げたシヨルダーバッグを腹の面に回す。腹減ったな。お昼前だったのでお腹は結構空いていた。けどこんなスクープを見逃すほど、俺の野次馬魂は弱くなかった。食事は後回しになったっていい。時と場合によっては三大欲求にも逆らえる。大学入試前の徹夜を思い出した。

先日染め直したばかりの茶髪に手をやる。染めたこともないような少年の髪は、俺の髪とは対照的につやつやと光を受け流していた。黒髪もいいかもしれない。日本人だし、真面目っぽいし。なにより素行の良さが窺える。どうにも俺は不真面目に見えるらしい。髪の毛のせいだと身勝手に憤った。

デザイン性のない単色で組み合わされた服装も、少年の温和そうな性格を外見で表わしていた。活発な様相は感じられない。インドア派なのだろう。勝手に決めつける。

彼は未だにぶつぶつ何事かを呟いている。菓物の類いでもやっているならば異常な興奮の

色で傍目にも分かるはずだ。学校の保健体育で聞き流していたうろ覚えの内容から彼の容態を判別する。目も白目を剥いていない。だが彼の普通ではない発言から幻覚を見ているであろうことははっきりと分かった。天使などいつの時代の話だ。いや、どこの世界の話だ。神話、宗教、ゲームでの話では天使などという単語が出てきても不思議ではないが、話し相手もない一人きりの状態でそんな不用意な台詞を普通は吐かない。だから彼の目にはきつと俺には見えない天使の姿が映っているのだろう。

少年に動きがあった。わなわな震えていたかと思うと、はたと立ち上がった、気弱げなたずまいから一転し、強気な眼光を光らせる。威圧感のある仁王立ちだった。その変化には驚くものがあり、先ほどとは別人の振る舞いに、俺自身他人事なのに戸惑っていた。他人事だからだろうか。少年にとつては違和感はないのかも知れない。

口元には嫌な微笑をたたえている。何もない空間を少しばかり見つめ、そこにある何かを確認した少年は焦点を別方向に差し向け、口の形をおぞましく歪めた。怖気が走ったのは、小学校の時に爆走した車に鼻先をかすめられて以来だった。

彼の目線の先には長い髪を垂れ流した大学生風の男がおばさんの隣に立っていた。灰色の髪の毛から感じる不良さはその優しげな顔から否定できる。人当たりの良い表情遣いで男がおばあさんを手伝ってあげようとしていた。いい人なんだろうと思った。

少年はその二人の方にはずかずかと歩いて行く。気づいた長髪の男が思わず顔をしかめる。少年のことを横目にでも見ていて知っていたのだろう。だとしたら気味悪がっても仕方がない。同情の念に駆られながら成り行きを見守る。

「あなた、そこでなにやってるんですか」

少年は長髪の男の前に来ると、顔に似つかない丁寧な声色で男の行為をいさめた。少年の顔はその声とは裏腹に怒っているようだった。落ち着いた声とすぐにでも爆発しそうな憤怒の顔。そのギャップに長髪の男は少し気後れした風でもある。おばあさんの方は完全に萎縮しきっていた。可哀想に。

「いや、えーと。おばあちゃんが重そうに荷物持ってたから、手伝ってあげようとしてたんだけど……何か……？」

男の返事を聞くと少年はますます怒気の色合いを増やした。眉間を強く寄せて睨んでいる。何か誤解をしているのだろうか。

どこか言い間違えをしたのか、と長髪の男は再度言い直す。始めの方は恥ずかしそうに自分の行いをしゃべっていた男も、少年の得も言われぬ迫力に気圧されてついには必死に説明を繰り返すようになっていた。

「だ、だから。親切で手助けしよう……って聞いている？」

「女の子は嫌がってるじゃないですか。自分の行為を恥ずかしいと思ったのなら、今すぐ謝りなさい。それでもあなたが間違っていないというなら、僕にも考えがあります」

少年は状況とかみ合わない言葉を吐いた。ポカンと呆気にとられる男とおばあさん。還暦をとうに過ぎたであろうおばあさんが女の子？ 俺は思わず笑ってしまいそうになった。

長髪の男は少年に聞く気がないとみて小さくため息をついたのだが、その息が最後まで吐き出されることはなかった。少年が彼の横面に拳を叩き込んだからだ。殴打の衝撃が音を成してその威力を伝える。俺はさっきまで笑いそうになってたことを忘れて、唾然とした顔を抑えることができなかった。少年の不穏な様子から何か起こるだろうとは思っていたが、この展開は予想できなかった。まさか暴力沙汰に発展するとは。動向を見守っていた他の野次馬も一様に驚いているようで、事情を飲み込めた女の人が悲鳴を上げると、その声が呼び水となって反応が広がっていった。

「お嬢さん、逃げてください」

男の近くで固まっていたおばあさんはヒイツと息を呑むと、買い物袋を握りしめて大慌てで逃げていった。悪魔という言葉を取り際に残していった。

おばあさんを追い払うと、少年の暴行は度合いを増した。すでにぐったりと横たえている男に対して非情なまでに蹴りを入れていく。まさに少年は悪魔に他ならなかった。

何も知らずにか、興味本位なのか、少年の横を通り過ぎようとした四人組の若者のグループがあった。長髪の男と同じくその頭を派手に飾っている。髪の毛の色は赤だった。少年は長髪の男に暴行を加えるのを止め、今度はそのグループに目をつけた。

「路上喫煙は禁止ですよ。煙たいです。副流煙の影響を考えてください。子供が肺炎になったらどうするんですか？ 迷惑かけちゃダメですよ」

少年の顔はやはり物腰と反比例していた。怖いと思った。

「何言ってるのこいつ。気味悪ーな」

「アレじゃね、気違いってやつ」

「だな。頭いかれてんもんな」

彼らは少年を無視して笑い声を上げる。

彼らは別にタバコは吸っていなかった。少年の顔に車の排気ガスがはき出されていたが、そのことを言ってるのかもしれない。

逆なでするような言葉が癪に障ったのか少年は突然キレて若者たちを強襲した。若者も四人だと思つて油断してたのか、無防備に構えていたところを不意打ちで襲われる。何とか体勢を整えようとするが、少年の威圧感はその隙を許さない。四人全員がのされてしまった。少年のどこにそんな力があるのだろうか。

狂気というのがどういうものなのか、それを説明するのに最適な例がすぐ近くにいる。辞書に書いてある言葉の説明など何の意味を持つのか。あれは言葉なんかでは説明できない。不意に少年の目がこっちを見た。足が竦む。俺はアレに見られてしまったのか。それだけで体が動かなくなり、近づいてくる少年からは逃げられなかった。

「あなた髪の毛の色おかしくないですか？ 周囲の害になつてますよ」

俺は不良じゃないと言いたかった。誰にも迷惑はかけてないし、髪の毛だつてオシヤレでやっている。なんなら黒に戻したつていい。だけど俺は恐怖で声が出せなかった。仮に

出せたとしても、行く末は変わらなかっただろう。

狭くなっていた視野では少年の拳を捉えることはできなかった。見えたとしても、恐怖に震えるこの体は固まっただけで避けれられないのは、予想できる。凶に乗って傍観者を気取っていたのがいけなかったのだろうか。俺の意識は弁解の言葉を発することもなく途絶えた。最後に視界に映ったのは、路上に倒れた被害者を笑いながら乗り越えていく少年の背中だった。

一忘れられない風景一

歩道の真ん中に天使を見つけた。書き出しはどれも決まっていた。

カーテンを閉め切ったワンルームマンションの一角。パソコンの載った机を照らすのは天井から垂れ下がる橙色の裸電球のみ。その明かりの下、私は書き上がったばかりの原稿を読む。これはノンフィクション。つまり実話だ。私の経験談と客観的に見たあの出来事を、視点ごとに書き分けて一つの小説にしている。知人に紹介されたある出版会社の編集者が、君の体験をぜひ本にしてくれないか、と熱心に私を誘ったのだ。自伝でもエッセイでも小説でもいいと言ったので私は小説を選んだ。その選択に特に深い意味はない。ただ物語風だと創作要素も絡むぶん、客観的に過去を振り返れると思っただけだ。私には過去を省みないといけない責任がある。この依頼はそれを果たせるいい機会だった。現在はその物語の制作中だ。

電話が鳴る。コンセントに繋がったままの携帯を手にとると、着信中の液晶にはかかりつけの病院でお世話になっている主治医の名前があった。

「はい、笹木野です。定期報告お電話ですか？」

事件の後、私はすぐに警察に捕まった。食事時だったのが幸いして目撃者が多かったらしい。通報も早かったとのことだ。

警官の言うことには素直に従った。髪の毛が黒い警官には。私の目には髪を染めている人が悪人に見えるらしく、髪を染めていた警官には襲いかかった。そのためか精神鑑定に難なく引っかけ裁判の結果は無罪となった。代わりに精神病院で三年間の治療を余儀なくされた。投薬やカウンセリングのすえ、発狂することはなくなったのだが、精神病というのは仮にその兆候がなくなったとしても、完全に治ったとはみなされないため、定期的に状態の確認をとらなければいけなかった。だから月に何度か主治医に定期報告をしなければならぬ。特に私は元危険人物。そのレンタルは死ぬまでついてくるだろう。

「ええ、それもあります。まずは体調の方はどうですか？ それから何か変わったことはありませんか？」

「そうですね、特にこれと言っては。体の方もピンピンしてますし、メンタルの方でも変わりはありませんね」

自炊をしない私は栄養面で多少の心配があったが、医者はそのことを尋ねているわけでは

ないのは分かる。

「それはなによりです。小説の方はどうなってます？ あれから進みましたか？」
今しがた推敲していたパソコンの画面を見る。前の定期報告で話したところから、お世辞にも進んだとは言いがたい。

「えーと、ぼちぼちですね。締めくくりの部分はどうしても浮かばなくて。編集者の方からは満足できるまで時間をかけていいと言われてるんですが、あまり待たせるのもどうかと思って、余計な期待もかけたくないですしね」

「あまり神経質にならないように、これは医者からの忠告です。それと本来の用件なんです。あなたが天使の見たという天使は頭上に金色のリングを浮かべていたんですよね？ それと似たような精神病患者の目撃報告が過去にもあったもんですから、一応確認をと」

言葉に詰まった。同じものをみた人がいる。私自身幻だったと割り切っていた事実に賛同者を得て、不明瞭だった事柄が僅かばかりの信憑性を持った。たとえ賛同者が精神病患者であったとしてもだ。

耳元で何度も呼びかける声がある。意識に膜がかかったままいい加減な受け答えをし、次の定期報告の予定を聞き電話を切った。

天使は私にとって畏怖の対象になっていった。神の使者なんて嘘っぱちだ。私は知った。もう子供の頃のように無邪気にゲームはできない。特に好きだったRPGには天使がよく出てくるからだ。

短く刈った髪の毛を無意識に掻き上げる。私はパソコンに手を伸ばし物語の続きを書き始めた。

一・・・がいる風景一

歩道の真ん中に天使を見つけた。あたしのことだね、そりゃ。人間のこっけいなつぶやきに吹き出しそうになる口元を必死で引き締める。天使ってなんだい？ そう言ってやりたかった。神様がいることぐらいあたしでも知ってるが、天使なんてものはこの世に存在しない。ただ人間があたしたちを指してそう呼んでるだけ。考えるとまたおかしくなってきた。きそうだった。

すまし顔で人間と対峙する。人間は若かった。あたしの故意に作った気味の悪い能面に気圧されて、可哀想なほど身が竦んでしまっている。正しく業務をこなすなら、すぐにでも人間を狂わせてやるべきなのだが、仕事を続けるにつれあたしは、この作業に楽しみを見いだすようになっていた。つまりはからかってやるということ。人間というのはおかしなもので、害を受けているにもかかわらず、あたしたちを神聖視する傾向がある。とんだお笑いぐさだ。彼らの思い込みを逆手にとって、かしこまった口調で偉大な者のように演技する。するとまるで神にでもなったような気分が味わえるというわけ。これのおかげであ

たしはこの仕事を飽きずに続けられてる。愚かな人間ごときに感謝なんかしないが、あたしの楽しみになっていくことについて恩は感じてる。ずいぶん上から目線の恩であるが。ターゲットとなった人間は自分が狂わされてるとも感じずに、曇った瞳を爛々と輝かせる。我ながらえげつない幻覚を見せているものだ。彼の目には自身が主役にでもなったかのような独善的な世界が映っているのだろう。

私はそれを観察して楽しむはずだったが、視界の隅に同業者の姿が垣間見え、珍しいこともあるものだな、と近寄ってみることにした。

「そこですつと見てたの？ いい趣味してんじゃない」

挨拶もそこそこに気安く話しかけてみると、少し癩に障ったのか、気後れたのか、彼女は綺麗な相貌に似合わない苦い表情をした。

「おっと、ごめんね。馴れ馴れしかった？ あたしそういう性格だからさ、鬱陶しいけど我慢してね。 あんた、あれ、隣の区域担当？」

彼女はようやくあたしの態度に慣れたのか、元の整った表情に戻って、コクリと頷く。

「ここはちょうど区分け範囲の境界線です。偶々通りかかったら貴方がお仕事をされてたようなので、話をしようと思っていました。ご迷惑だったでしょうか？」

「いいや、あたしも同業者に会うのなんて初めてだからね、話してみたいと思ったし」

本来、区域がきっちり分けられているので、同業者同士は会うことはない。しかし囲いの細い線上に限ってみれば、確率的にはあり得る。その偶然を凶らずも引き当てただけだった。

彼女の容姿は同性のあたしでも目を見張るものがあつた。作りものめいた目、鼻、口のパーツ配置は緻密な計算の黄金比で成り立っているようで、しなやかに伸びるその肢体と合わさって至上の体と思わしめた。全く羨ましい限りである。全体をなめ回すように眺めていると、ふとおかしな箇所気がついた。頭上の光輪の輝きが鈍いのだ。あたしのパツとしない表情に、彼女は首をかしげる。

「どうしたんですか？ なにか変なところでも？」

あたしの顔色に感化されてか、彼女は不安げな及び腰になっていた。

「いやー、これだけ完璧な容姿なのに、輪っかだけはいまいちだなんて。気にしてるなら、ごめん。けどそんだけ綺麗なら、一個ぐらい欠点ないと、あたし神さまのこと恨むよ」

あけすけなあたしの感想に、しばしキョトンとなるも、なにがおかしかったのだろうか小さな笑みをこぼす。その仕草にあたしはやつと親近感をもてた。同業者同士、これからも仲良くやれるかな、と思ったのだ。

しかし、その期待は裏切られた。控えめだった笑みはいつしかあざけりに変わり、これまでの慇懃な物腰が一変した。

「あーあ、即興だったからな。さすがの俺でも失敗するか。完璧ってのは難しい。あの一週間の最後の日を思い出すよ。手抜かった、手抜かった」

あたしは唾然としてた。急に口調が男っぽくなったかと思うと、頭上の輪を手にとって不

思議な力で修正しだしたのだ。なにが起こっているのか、あたしは事態について行けない。あたかもさっきの人間のように、体が硬直していた。

「びっくりした？　びっくりするよね。びっくりしないと面目丸つぶれだし。どーも、初めまして、神です。いや、神と呼ばれている者かな？」

戸惑いを隠せなかった、あたしの茫然自失の形相に、神と自称した彼女はクッククツツと声を漏らした。輪っかは輝きを得て彼女の頭の上に戻っている。

「これでどーお？　完璧？　完璧だよ。なんせ神だし」

答えを待たないで、彼女は自画自賛にうそぶく。

「ちよつとミスしちゃってたけど、俺の芝居うまかったでしょ。もっと楽しむつもりでいたけど、バレちゃったらしようがない。あんたには狂ってもらうよ。すぐ楽になるから安心していいよ」

そう言うとき彼女はあたしがしてみたいに目をウインクするように開閉する。

「これで合ってたっけ、……まあいいや。もう聞いてないみたいだし」

ほどよい狂いは世界に均衡を保つ効果がある。研修の時に教えられた幸福の量が一定だとする理論では、自分たちの幸福を食い尽くされないように、あたしたちには人を狂わせる機能が備わっている、とまとめていた。狂いとはひどく不幸なものらしい。自身にも、周囲にも、負の影響を与えていく。

そういえば、あたしたちの中にも人間と同じように狂い出す者がたまに出ると聞いたことがあった。人間と同等みたいに扱われているようで、これまで信じずにいたけれど、今納得した。世界は狂うことで成り立っている。狂うことが世界を保っている。

薄れゆく意識の中で、あたしの目は暴れ狂う人間を捉えていた。あたしのやった仕事の結果を。

神さま、あんたもさ、どーせ、宇宙人やら、最高神やら、あんたより上の存在がいつか来て、狂わされちゃうんだよ、きっと。きっと、ね。絶対にだよ。

届かない心のつぶやきは獣のような雄叫びに掻き消された。自称神さまはもういない。